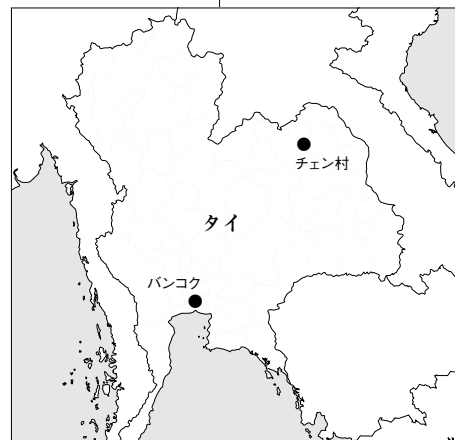


# バンチェン遺跡ブームとその後

なかむら まりえ  
中村 真里絵

民博 外来研究員



ある大学院生の発見をきっかけに一躍有名となったタイのバンチェン遺跡。ブームが過ぎ去った後も村人たちの生活や記憶に深い影響を及ぼしている。

## バンチェン遺跡の現在

バンチェン遺跡はタイ東北部ウドンタニ県ノンハン郡チェン村に位置する先史時代の集落遺跡・埋葬遺跡である。その歴史的価値が評価され、一九九二年にユネスコの世界文化遺産として登録された。

遺跡から出土した人骨、そして多数の土器、青銅器、指輪や首飾り等の副葬品は、チェン村のバンチェン国立博物館やポーシーナイ寺院内の遺構にて展示されている。遺物のなかでも表

面に赤褐色の渦巻き模様を施した土器は、遺跡のシンボリックな存在である。同じく世界文化遺産である中部のアユタヤ遺跡やスコータイ遺跡のような仏教遺跡と比べると、バンチェン遺跡のたたずまいはやや地味ではあるものの、歴史好きの欧米人や日本人観光客からも一定の人気があり、観光資源の少ない東北部において重要な観光地のひとつである。

しかし、この遺跡がかつて世界の考古学者や古美術商らの注



渦巻き模様を描いた土器の土産物

目を集めたことを、やってくる観光客のうちどれほどの人が知っているのだろうか。

## 東南アジア先史研究上最大級の発見！

この遺跡の名が広まるきっかけとなったのはハーバード大学で人類学を専攻していた大学院生のスティーン・ヤングの来訪であった。ヤングが村へ調査にやってきた一九六六年、菩提樹の根元で転んだ際に古そうな土器片を見つけた。これをアメリカに持ち帰り年代測定をしてもらったところ、紀元前四〇〇〇年もの古い値が出たことにより、世界最古級の文明発

祥の地の可能性を示す場所として、バンチェンの名が一躍世界に知れ渡ることとなった。この発見は日本においても注目され、考古学者らが東南アジア考古学に関する自主勉強会を開くようになったほど大きな出来事であった。後に遺跡が当初の指定年代より新しく紀元前二五〇〇〜二〇〇〇年以降のものと確認されると、このブームは徐々に収束していった。

## ブームと村人たち

バンチェン遺跡の発見とそのブームは村人たちの生活や価値観にも影響を与えた。彼らは一七五八年ごろにフオスのシェンクワーンから内戦を逃れて移住してきたタイ系民族タイプアンの子孫である。わたしは昨年度から遺跡にかかわる村人たちの生活史の聞き取りを始めた。

かつて村人にとって遺物はそう特別なものではなかった。雨季になって雨水が表土をけずり

出すと遺物が地面から露出するため、しばしば目にしていた。しかし、バンチェン遺跡の名が知られるようになると、古美術蒐集家らが遺物を高値で取引するようになったため、村人が屋敷地から遺物を掘り出して仲買人らに売るようになった。遺物の流出を防ぐため考古学者らがその重要性を説いたが、なかなか受容されることはなかったという。しかし現在では、村人はこの遺跡の保護の積極的な担い手となっている。

## バンチェン世界遺産祭り

ある村人にバンチェンのことを本当に知りたいのなら、バンチェン世界遺産祭りに来るべきだと勧められ、毎年二月上旬に開催される祭りへと赴いた。博物館の無料開放や移動遊園地、屋台、複数の特設ステージで披露される伝統音楽や舞踊、歌謡パレードの実施、一年で村がもつ



国立博物館の入り口。上には国王行幸時の写真

とも多岐にわたる見せ物も、メインステージでは中高生たちが毎年決まって遺跡発見時から現在にいたるまでの村の歴史の再現劇を三晩演じる。その最大の見せ場が一九七二年のプミポン現国王によるバンチェン行幸のシーンである。ここで、国王は声のみで「このすばらしい遺産を後世に伝えるため、大切にしよう」と説き、それを村人がひざまずいて聞く。

確かにこの行幸は、一生に一度あるかないかの出来事として村人たちの記憶に深く刻まれており、調査時の話題に上がるこ

とも多い。当時、乳飲み子を抱えていたある女性は、授乳の合間に国王を一目見ようと懸命に走ったことを話してくれた。田舎の村に国王がわざわざ遺跡を見に足を運んだという事実は、村人たちにとっての遺跡や遺物への思いを特別なものにするのに十分な出来事であった。国王行幸によって遺物の売買取りが、たかくなったわけではないが、祭りの会場や博物館のあちこちで目にする国王行幸時の巨大な写真・パネルが、タイ国家ならではの文化の継承のあり方を示しているような気がしてならない。



世界遺産祭りの中央ステージでの再現劇の様子